

## 川崎信定訳

### 『チベットの死者の書』

ツルティム・ケサン

私が東洋文庫で川崎信定先生に初めてお目に懸かったのは、日本にやって来たその歳つまり一九七四年のことであったと思う。先生の年配の方々の中では、チベット語をよく読まれるだけでなく会話にも堪能であられた数少ないお一人としてよく記憶している。以来先生には昵懇にして頂いている。この度、先生がパドマサンババ（八世紀）によって著され、十四世紀にリクジン・カルマリンパによって発掘された典籍として巷間に広く流布しているニンマ派の書『バルドゥトェドル』をチベット語から和訳された御努力に満腔の敬意を表したいと思います。

私に日本語の訳文の出来不出来の如何に關して云々する資格のないことは元より承知している。また一般的に言って、その文化の詳細が未だ充分には研究されておらず、従ってその理解を助ける研究書や辞書類もまだ極めて数少ない、チベット語文献のような資料を取り扱う分野に於いて、外国人が独力でその資料を理解するという作業の前に立ちはだかる困難さは、さぞや大変なものであらうと推察する。チベット人にすら難解な哲学書や思想書は、それが論理的に記されており且つよく研究されて用語が周知されているという理由の故に、却って外国の研究

究者には理解し易く、逆に本書のように或る種、民間信仰的な要素を持った内容のものの場合には、われわれチベット人にとっては何でもないような言葉が、外国の研究者には、その言葉の多義性と未定着性との故に、意外に難解な概念として受け止められ誤解されてしまったりしがちである。そのような状況下で苦勞を重ねて翻訳を完成されたことを考える時、そこに散見される多少の誤訳をあげつらうことは、誠に差し控えるべきであらうと思う。拙文末尾に不本意ながら二、三書きとどめた誤訳も多分そのような現在の学問状況下では止むを得ない事情によって生じたものであらう。

さて本書はその表題が示すように、死者が次の生を受けるまでの存在である中有（バルドゥ）に於いて、後に残された者の唱える祈願の言葉をただ聞く（トエ）だけで修業や学問を要せずに解脱（ドル）するための方法を述べる書である。この表題が『チベットの死者の書』と呼ばれるようになったのは、恐らくエバンズ・ヴェンツの英訳 *The Tibetan Book of the Dead or the After-Death Experience on the Bar-do Place* (Oxford, 1927) に由来するのであらう。しかしこの英訳も正しくない。

確かにチベットでは本書は葬儀の場合に広く一般の人々に読まれるものとして人口に膾炙しているが、少なくともチベット最大の宗派であるゲルク派は本書の中有に關する記述を正当なものとは認めていない。従ってその呼称（略称）の通りに『中有に於いて聴聞のみで解脱する書』とでもするか、もし英訳に倣うとすれば『ニンマ派の死者の書』とでもすべきである。

私がこの表題の和訳にこのようにこたわるのは、実は下記の  
ような理由があつてのことである。まだその事柄もよく理解で  
きない少年時代に、当時一世を風靡した論争の噂を人伝てに聞  
いたことがあつた。その論争の詳細は後年になって、私の直接  
の師ゲシハルデン (dGe bshes dpal ldan) から詳しく教えら  
れて理解することができた。その論争は、ゲルク派の学僧ゲシ  
ハ・シハルカルチヘゼ (dGe bshes shel dkar chos mdzad)  
とニンマ派の学僧タクカル・カギュリンボチヘ (Brag dkar  
bka' bgyud rin po che) との間で、本書『バルドゥトヘド  
ル』の内容の当否に関して、書簡を以て交わされた。シハルカ  
ルチヘの本書に対する主たる批判の一つは、その書が説くよ  
うにタントラを聞いただけで悟れるのであれば、修業や学問の  
必要がなくなってしまうであろう。そしてもしそのようなこと  
を認めるならば、チベットに於いて多くの人びとの尊敬を集め  
ている行者ミラレーバなどの行跡が意味のないこととなつてし  
まうであろう、というものであつた。

更にもう一つの決定的な批判は、本書が正当な仏教書として  
の資格を欠いていることを指摘するものであつた。即ち彼は本  
書にタントラの言葉として引用されている語が実は世親の『俱  
舍論』の言葉を改竄したものであることを明示し、もしそれが  
その書が言うように真にタントラからの引用であれば、その典  
拠を示すようにせまったのである。このように出典の提示を求  
められて返事に窮したタクカルの答えは、次のような滑稽極ま  
るものであつた。つまり彼によれば、本書はいやししくもチベッ

ト仏教の祖バドマサムババの著作である。そしてバドマサムバ  
バは不死なる人であり、遙か昔には阿難の弟子であつた。本書  
はその阿難から直接聞いたものである。故にたとえ現存のタン  
トラ中にその語がなくても、今は散失したタントラの中にはそ  
のように説かれていたに相違ないのである。従つてその語をタ  
ントラからの引用としたからと言って何も問題はないと言うの  
であつた。

タクカルの強弁にも拘らず、問題のその言葉が『俱舍論』の  
語の改竄であるというその指摘は、『俱舍論』を主要五科目の  
一つとして暗唱しているゲルク派の僧侶たちには極めて明白な  
ことであつた。そのような愚かしい返答をしたタクカルは人々  
の嘲笑を受けざるを得なかつた。しかしその内容がこのように  
いい加減なものであるにも拘らず、真面目な仏教徒の心配をよ  
そに本書は益々普及して行つた。ここで私は本書が如何に仏教  
の教義に悖るものであるかを示すために、その論争で問題とな  
つた「タントラからの引用」とされる語及びその解説を取り上  
げて読者と共に検討してみたい。それは川崎訳では一〇〇頁五  
行目に次のように出てくる。下線は『俱舍論』にそのままの形  
で出ていることを示す。

『タントラ』によれば《バルドゥにおける身体は、輪廻の  
輪の中の生前の生涯、またはこれから後に受ける生涯にお  
ける肉や色形を持った身体と似た形をしている。バルドゥ  
の身体にはもろもろの器官とその機能が完全に整つていて  
障りなく活動している。この身体はカルマン(業)の影響

による超能力(神通力)をそなえていて、類を等しくするもの、すなわち天人なら天人同士の、清らかな透視眼(天眼)によってのみ見られることができる」と述べられている。

ngon 'byung srid pa'i sha gzugs can, dbang po kun  
tshang thogs med rgyu, las kyi rdzu 'phrul shugs  
dang ldan, rigs mthun lha mig dag pas mthong.

問題の語は御覧のように四句からなる頌偈の形をとっている。後半の二句はシュカルが指摘するようにそのままの形で『俱舍論』第三章第一四偈(ab)に見い出される。前半二句は、それがつまり改竄と非難される所以であるが、そのままの形では現れない。その内のa句は『俱舍論』同章第一三偈b句を改作したものである。後の記述との関連からここに、第一三偈ab句を共に挙げる。傍線はその語が『死者の書』にもそのままの形であらわれていることを示す。

de ni 'phen pa gcig pa'i phyir, ngon dus srid 'byung  
sha tshugs can (Pek. Gu, 137, b, 7-8)

それ(中有)は「次の生涯を引く業」と同一の「業」が引くのであるから、次に生ずべき生涯の存在の姿をしている。

次のb句は『俱舍論』同章第一四偈c句を改作したものである。そのc句を上と同様に『死者の書』と対応する箇所の下線を施して挙げると次のようである。

dbang po kun tshang thogs med ldan (Pek. Gu, 139, a, 7)

感官は全て揃っており、なにもにも抵触することがない。この「タントラ」に対する『死者の書』の解説は、仏教の中

有の教義に関する著者の無知を曝け出している。川崎訳では一〇〇頁一行目から始まる。この箇所の川崎訳は些か不明確である。次のように訳すべきであろう。

さて「タントラ中に」生前の生涯と次の生涯と言っているが、「その中、生前の生涯云々と言ったのは次のことを意味するのである。即ち中有に於いては先ず」汝の生前の業が残した影響力(習気)によって「生前の身体と」同様の姿をした肉体が生ずるというのである。しかも「その身体には大昔の」良い時代の身体と同様、「本来仏にしか備わらないとされる」三十二相と八十種好がほんの少しであるが備わっているのである。意から成る身体として現れているのであるから、中有の現れは意身と呼ばれる。その時に「汝が次の生涯で」天に生まれるならば、天の身体の現れが生じ、阿修羅、人間、畜生、餓鬼、地獄のどこであれ、生まれるべき所の現れが汝には生ずることであろう。

そういう訳で、「タントラ中の」生前の生涯(sngon)という「語」は、死後の三日半までは生前の業が残した影響力による姿形が現れることを示している。また「タントラ中の」次の生涯('byung)という「語」は、それ以後に生まれる境界の現れが生ずること('byung ba)を示す。故に「タントラでは」生前の生涯と次の生涯(sngon 'byung)と言っているのである。

『俱舍論』の偈頌は、前にも述べたようにチベットでは仏教の基礎学として暗記するまで学習しなければならない重要なテ

クストである。『死者の書』の著者も何かの折りにこの偈を聞いたのであろう。しかし彼は大変な聞き間違いか或は早合点をしてしまったようである。誤解の元は *sgon dus srid 'byung* (Skt. *aśvatpūrvakābhāva*: 玄奘、当本有) という用語の解釈を過ったことにある。この語はヤシヨミミトラが註釈している。つまりこの句は、中有の者に次の生涯に於いて生まれる存在、つまり人間とか動物とかの存在の姿が既に備わっていることを述べているのである。にも拘わらず『死者の書』の著者は、この用語を二語に分けて、生前の生涯と次の生涯を述べるものと理解したのである。更に悪いことには、彼はその註釈で、中有の最初の三日半の間は生前の業の影響力によって生前と同じ姿をしていると述べているのである。これは全くの誤解で、先に引用した第一三偈 a b 句に世親が述べているように中有に於いては生前の姿を捨て、次に生まれる生涯の姿を取ることは言うまでもない。

ゲルク派では中有は仏教の重要な概念であると考えられており、決してこのような間違った解釈は許容されない。ツォンカバも彼の著作『ラムリムチェンモ』(青海民族出版社、一九八五年、p. 244, 16 ff) の中で中有を『俱舍論』に於ける世親の註釈の通りに説明している。また彼の生涯に於いても中有は重要な意味を持っている。例えば高弟ケートツップの手に成るツォンカバの伝記『バルデンサスン』(Pal lhan sa gsum ma) (Zhal 'don phyogs bsgribs 所収、四川民族出版社、p. 87, 11

一) にはツォンカバが中有に於いて解脱を得たことが説かれている。つまり密教では修業が進んで最後の段階に達した時には、無上瑜伽タントラに基づいて性交を行うことによって解脱に達するとされる。ツォンカバもその段階に到達していたが弟子たちの教育のことを考えて、敢えてその道を選ばず、故に即身成仏はしなかった。しかし彼は既に空性を悟っていたので死後に中有に於いて解脱したと言われている。この故事に反映しているように、ゲルク派では中有を悟り可能性のある場所として重視し、それ故にその仏教の教義を正しく理解しようとしてきたのである。それだけにニンマ派の非仏教的な解釈は厳しく排斥されなければならないのである。

他方ニンマ派には單に中有に関する典籍だけではなくこの種の信憑性のない書物が甚だ多い。それはそれらの書の殆どが発掘典籍(テルマ)であることと密接な関係がある。発掘典籍とは本書のように、昔バドマサムババによって著作されその後埋藏されていたものが、バドマサムババの生まれ代わりを称する者の手によって発掘されたとされる典籍のことである。恐らくは発掘者(テルテン)自身の著作ではないかと考えられるが、ニンマ派ではバドマサムババのものであると言う。ニンマ派のみならずチベットの一般社会でも優れた発掘者は非常に高い名声を獲得することができる。そのことが彼らを誤らせるのではないかと思われる。或る有名な発掘者には次のような滑稽とも悲惨とも言い得る、しかし発掘典籍の出鱈目さ加減を遺憾なく伝えるエピソードが残っている。その発掘者は或る日、湖から

黄金の仏像を発掘することを公表した。多くの観衆の見守る中、彼は湖に潜った。しかし彼は浮き上がって来ず、湖底で溺死していた。彼の死体を引き上げ衣を脱がせた時、人々はそこに驚くべき光景を目にした。彼の股間には金の仏像が輝いており、それを結わえた紐は彼の男根に絡まりそれを締め付けていた。

彼の企みは暴露され、彼の愚かしさは知れわたったが、巷間ではその後も発掘典籍の人氣は衰えを見せない。その原因はひとえにその内容が俗耳に入り易いということにある。そしてこの大衆に容易に受け入れられるという教義の側面がニンマ派を墮落させチベット仏教を退廃させているのである。一九世紀前半のチベットの様子を記した旅行記『ザムリムゲン』(Sprul sku 'jam dpal chos kyi bstan 'dzin 'phrin las, 'Dzam glin chen po'i rgyas bshad snod boud kun gsol me long, Delhi, 1980, 95, a, 3)に「最近ではカードム派とゲルク派と思想家(nutshan nyid pa)の三者には区別がなくなってしまった。〔つまり思想家と呼べるものはゲルク派だけになってしまった。〕デイグンカギュ派とタクルンカギュ派とニンマ派の三つも区別がつかなくなりつつある」と記されているように、当時既にニンマ派は思想家としての堅実な学問を行わず、その安易な教義でカギュ派をもニンマ派化していたのである。

私は本書の和訳によって、チベットに関心を持たれる日本の読者がチベット仏教の全てをニンマ派と同様のものと誤解されないことを切に期待する。否むしろそれ以上に本書によってニンマ派の非仏教性を理解し、本来の仏教の在り方を考えて頂く

ための一助にして下さることを念願する。というのも私が尊敬し愛して止まない日本及び仏教界に於いても、しっかりとした学問研究を軽視し、俗愛けする安易な思想でこと足れりとする風潮が相当根強くはびこってきており、それが延いては様々なまやかしの宗教の蔓延を温存し助長する一因となっているように思えるからである。

以下に私には不適切と思われる和訳とその訂正を掲示する。

八頁一〇～一一行目、はじめからたてていることは適切ではないので↓全くだててはならないので。九頁一行目、準備ができるならば↓財産がある場合には。同二行目、準備できない場合には↓財産のない場合には(以下同様に、準備は財産と訂正)。

同二～三行目、準備できる限りのものを整える↓できる限りの供物を供える。一一頁五行目、理解力は良いがまだ覚っていない人↓光明のことを理解してはいるが、それを実際に納得してはいない人。同、覚ってはいるが実践の浅い人↓納得してはいるが熟達してはいない人。同、教えの伝授を願っている↓実際の伝授を受けたことのある。一五頁五行目、黄色い水↓体液(リンパ液)。一六頁二行目、解脱方法を行うべきである↓「死後にはくしよう」と思うべきである。一七頁一行目、大空にも等しい完全なる↓大空にも等しいすべての生きるものたち。

〔本稿を日本語にするについては友人の小谷信千代氏の協力を受けた〕

〔一九八九年五月二十五日、筑摩書房、四六判一九二十一  
十三頁、一四四〇円〕